

平成23年度 第2回 食の循環によるまちづくり推進委員会 議事録

日 時：平成24年3月29日（木）午後5時00分～午後6時20分

会 場：志まや（新潟県新発田市御幸町 1-1-1）

参集者：20名

出席委員	下條荘市委員長、清野千香子副委員長、渡辺栄子委員、嶋谷次郎八委員、高橋聖治委員、西鉄幹委員、木戸寿明委員、佐藤ミネ委員、高山廣伸委員、林洋子委員、伊藤ひろみ委員、佐藤恭子委員、加藤康弘委員、渡辺兼一委員、津村賢委員、星野龍一委員、下妻副参事（菅一義委員）、市野瀬節子委員、長谷川副参事（茂野栄委員代理）、山口恵子委員 （欠席委員） 菊池敏明委員、中村光昭委員、浮島一雄委員、近藤佳司委員、中野柳委員、目黒武志委員、中林勝美委員、薄田清委員、中野則司委員、小林一茂委員、神田より子委員、小林豊男委員、赤塚昌子委員、鈴木裕子委員、小野伸子委員
アドバイザー	新潟医療福祉大学 健康科学部 串田修助手（村山伸子教授代理）
事務局	新保教育部長、高橋食育推進課長 食育推進課 食の循環によるまちづくり係（櫻井参事、神田主事、佐久間臨時）

1 開会

2 あいさつ

- ・新保教育部長あいさつ
- ・下條委員長あいさつ

3 議事

（1）平成23年度事業報告について

【委員長】

これについて事務局からご説明願う。

【事務局】

- （資料 1 「食の循環しばたリレートークの開催等事業報告書」に基づき説明）
- （資料 2 「食の循環しばたモッタイナイ運動協力店のアンケート結果」に基づき説明）
- （資料 3 「『食の循環しばたモッタイナイ運動』の取組状況及び今後の取組について」に基づき説明）

(2) 平成 2 3 年度事業収支決算見込みについて

【委員長】

これについて事務局からご説明願う。

【事務局】

(資料 4 「食の循環啓発事業収支決算書」に基づき説明)

【委員長】

いろいろな事業を 1 年間かけて行ってきたが、特に力を入れてきたのがリレートークと大使との交流イベントだったと思っている。ただ今の説明について、ご意見ご質問はあるか。

【委員】

(なし)

【委員長】

ないようなので、拍手をもってご承認願う。

【委員】

(承認)

(3) その他

【委員長】

先日、各委員に対しモットイナイ運動に関するアンケートを行い、資料 3 としてまとまっている。モットイナイ運動は形が見えないものであることから、どのようにしたら良いものか課題である。各々の取組についても感想で構わないのでお聞かせいただきたい。

【A 委員】

心掛けているのは、なるべくおなかの空いている時に買い物はしないということ。毎日のことなので、おなかがいっぱいの際に必要な分だけを買うことにしている。

【B 委員】

この運動は今年から来年度にかけて大きく変化するというものではなく、やはり意識啓発していく事が大切であり、かなりの時間を要するものと思う。私共、料理業からすれば、他委員のアンケート回答にもあるように、できるだけ持ち帰りにならないよう、その場で食べていただける献立で提供するように努めているところである。ただ、最近はお客様の方から「持ち帰って良いか。」と尋ねられて、パックに入れて持ち帰っていかれるような場合が少しずつ増えてきているように感じている。

それから、毎週月曜日に例会があり、昼食を召し上がる機会があるのだが、参加者自らその日の状況に合わせて「少なめにしてください。」と言われるなどもあり、そうした対応に努めているところである。

そうした意識がしっかり定着してくることを期待しているところである。

【C 委員】

持ち帰りなどもしてもらい、また、ライスなど大、中、小用意し、お客様が必要な分のみ提供している。特に「少なめで良い。」というお客様が多いので、適宜そうした準備で対

応しているのだが、本当の意味でのモットイナイを進めていくと、多少のロスが出てしまう。生ごみが少ないものの、そうした生ごみが出た場合は、肥料にするといった取組を一部契約農家などで行っていきたい。私は子どもの頃から食べ物を残すとモットイナイという意識で育ってきているが、今の時代、若い世代の方は「モットイナイ」という言葉は知っているけれども、そうした心掛けは薄れてきているのかも知れない。そうした意味ではモットイナイ運動を知らない方も多いかとは思われるが、ポスターを見かけたということだけでも、記憶にあるというか浸透してきたところが見受けられる。目に見えない個人の感覚というところもあるので、少しずつ浸透していけば良いのかなと思っている。これからもポスター等表示していきたいと考えている。

【D委員】

医師会として統一したものがあるわけではないが、宴会などでは最後に食べ物は残るけれども、酒だけはなくなる。私が司会の時には、はじめは席を立たないで食べて欲しいと言っている。

医者というのはどちらかといえば「あなたはこうしてください。」という制限をしている立場にあるので、その人に合った食事を勧めている。

【E委員】

医療に携わる立場からすると、どちらかという制限する面があるので、なかなか「モットイナイから食べる」というよりは「食べるな」という立場であり、非常に難しい。委員長お話のとおり、モットイナイということが漠然として非常に難しい。非常に良いことだけれども、なかなか捉えにくい。その中で、敢えて取組を継続していくうえでは、市民一人一人の心掛けをもって、モットイナイ運動に取り組んだ結果、こうした成果があったというものが必要に思う。それが、残さが減った結果、市の負担がこれだけ減ったというようなもの、あるいは精神的なもの、例えば食に対する感謝の気持ちであれば、学校での取組の結果、子ども達にこういった変化が見られた。何もしていない学校に比べ、新発田の子ども達にはこういった変化が見られたなど、そういったものが分かってくると、我々も市民ももっと取り組んでくれるのではないかと。

【F委員】

食生活改善推進委員協議会では、買い物に出かける前に冷蔵庫を確認し「買い過ぎない、作り過ぎない」をモットーに会員みんなで頑張ってきた。これからも身近なところから続けていきたいと思う。支部は新発田市、阿賀野市、聖籠町、胎内市の4市町で構成され、一同に集まって会議をするのだが、そこでもこのモットイナイ運動の話をしなが、牛乳を買う際の話をした。県の先生は「非常に良いことだ。新発田に見習いましょう。」と言われ、鼻が高かった。これからも続けていきたい。

【G委員】

私もB委員と同じである。この運動は、我々の世代では親から耳にたこができるほど言われたことだが、若い方は余り言わなくなっていると思われる。このモットイナイという言葉が如何に浸透させていけるかが大事である。やはり教育の中で言い続けていかないと成功しない。健康の話にしても、減塩であるとかそういったものは子どもの頃から教えていかないと定着していかないとと思っている。

【H委員】

やはりモットイナイということを出して周りに言っていくことが大事である。食べ残しを減らすように心掛けて調理するのだが、食べにくいものを食べやすいようにするといった調理法にするなど工夫しながら、これからも忘れずにモットイナイを口にしていきたい。

【I委員】

確かにモットイナイという言葉を出して子ども達が少なくなってきた。それでもこうした機会を得て、大人がモットイナイを出して子ども達に教える機会が増えてきたのかも知れないという感じを受けている。子ども達は言葉の意味をなかなか理解できないかも知れないが、大人達が口にしていくことで子ども達にも浸透していくと思う。

月に一回、食育の日を設けて、子ども達に対し食に関する事を教えているのだが、その中では現在のところ、モットイナイよりも箸の持ち方などを教える取組が多かった。これからはモットイナイを教育していくことを計画の中に入れて取り組む予定としている。なかなか、全体でとなると難しいが、発信していきたい。

【J委員】

NPOとして平成8年頃から取り組んでいるが、正直、大人はモットイナイとは言えど、なかなか大人に対しても教えていくのは難しい。そういう思いから、小学校への取組を始め、平成10年から小学校への取組を始めた。現在に至るまでの間、小学校の方が給食残さは減ってきている。一方、中学校に入ると非常に給食残さが多い。ただ、学校に聞くとところによると「給食残さが減った学校は学力も向上している。」と校長先生から言ってもらっているので、多分、食べることで学力の向上は関係しているのかも知れないと感じているところである。

【K委員】

もう少し委員を増やしてみてもどうか、一般市民からもお願いしてみてもどうか。そうすれば少しずつでも広がっていくのではないかと考えている。

【L委員】

食の循環として「調理」面でご厄介になっている。私どもの取組では東京ガスの登録商標となっている「エコ・クッキング」という活動をさせていただいている。できるだけ運搬といったエネルギーを使わない地元の食材を使い、料理するという取組を行っている。残さについても、できる限り食材を活かして使うという形の調理方法を用いている。それでも、必ず残さは出るので、ユー&ミーのご指導をいただきながら、回収しているところである。

全国的な展開として「親子クッキングコンテスト」というものを毎年開催している。今年で6回目、食育基本法ができた当時から開催している。若い親が朝ごはんを作らず、食べないまま小学校に通うお子さんも多々いるとの話もあったことから、親が駄目なら、子どもから引っ張ろうということで、料理に興味を持たせ楽しみながら、親を変えていこうという趣旨で開催している。今年是全国では2万数千件の応募があったが、こうした動きが広がっていけば良いと思っている。

アンケート結果を見ると40～60代の方が多くいらっしまったという印象だが、新発

田では条例や取組もあるので、是非とも20～30代の方にこれらの取組を知っていただけるようにして、より多くの方々に参加してもらえようようにしたいと思う。

【M委員】

有機の里交流施設運営協議会の方ではいろいろな農業体験イベントを実施しており、なかなか子どもから大人までモットイナイを教えようと思っても、伝わりづらいと思うので、体験、五感（たい肥の匂いなど）を通して交流し、汗をかいて食物を作っただき、それを食するという前提でモットイナイを感じていただく取組をしている。さらにこれからも大勢の方に参加していただきつなげて参りたい。

【N委員】

先々週、県庁へ行き、福島県の方と交流する会に出席してきた。その中で、隣県である本県では放射能なども意識せずに済んでいることに対する幸せというものがあると、ひしひしと感じた。モットイナイ運動での取組も非常に大事だが、食材に対する信用、信頼を否定された時の怖さというものを感じた。

【O委員】

農林水産課としては、現状として見えない面もあるが、生ごみからたい肥へ有機資源センターを活用している。学校給食の生ごみについては、平成22年に80トン、平成23年には74トンと取組学校数は15校と変わっていないが、こうした取組を通じて生ごみは減ってきているのだろうと思っている。一方、家庭生ごみは市内11地域にて取り組んでおり、食品産業生ごみについては若干の増加という状況である。推測ではあるが、食品残さ、通常であればごみとなるものを資源として扱おうという意識の表れではないかと思っている。

有機資源センターでは、平成21年度までは生ゴミ堆肥と特殊堆肥に分けてきたが、平成22年度から、資源という扱いで特殊堆肥として一本化し、食の循環の中で農家の方に使ってもらっている。

【P委員】

健康づくりということで、その中で栄養講習会や健康教育の中では特に「野菜を多く取ろう」という活動を行っている。野菜を無駄にしない、出来るだけ活用しようということでレシピ集を作成し、食生活改善推進委員の皆様と協力して進めている。大根一本使い切りレシピであるとか、そういった講習会をイベント等で開催している。今後もそういったことを工夫しながら取り組んでいきたい。

【Q委員】

モットイナイ運動取組協力店様からのアンケート取りまとめをさせていただく中で、皆さんは一生懸命取り組んでくれていると感じ感謝しているところである。目に見える結果があればもっと広がるのではないかとのご意見もあるが、環境衛生課ではごみの量の集計等行っているところであるが、生ごみの量というものについては工夫次第で何とか把握できるのではないかと模索しているところである。

【委員長】

今、皆さんから大変良いお話を聞いた。

やはり、G委員のお話もあったが、形の見えないものをいかに浸透させていくかは地道

にやっっていくほかないのかなという気持ちでいる。

モッタイナイは高度成長時代など、あたかも残すことが美德のような時代もあったものの、そうした時代を経て、再びモッタイナイという言葉が脚光を浴びており、皆様も努力されているというお話も聞けた。非常にありがたいと思っている。

最後に、アドバイザーである新潟医療福祉大学の村山先生からお話をいただきたい。

【串田助手（村山教授代理）】

新潟医療福祉大学助手の串田です。昨年度からオブザーバーとして参加させていただいているのだが、本日は村山教授の代理として感想を述べさせていただく。

Ｃ委員のお話にあるとおり、リレートークのアンケート結果を見ても、女性が８割以上、５０歳代以上が７５％であったり、一方で小・中学校での取組をされている方もいらっしゃるので、今後はある程度ターゲットを絞っていく必要も重要なポイントである。

環境衛生課取りまとめの協力店のアンケート結果によっても、行動として食べ切る、持ち帰るといった変化が見られていることについては、早くも変化が見られているようで少し驚いたという感想だが、行動へのアプローチだけでなく、知識や態度、つまり行動に移る前のアプローチも長いスパンを考えた時、重要ではないかと感じている。

例えば、モッタイナイという言葉は抽象的で、出されたものを食べ切るだけではないし、私どもが考えるモッタイナイは自分の適量を知り、予め、その分量を伝えるということも重要と思っているので、行動だけではなく、知識から始める必要があると感じたところである。

４ その他

【委員長】

本会の委員の任期が２年となっており、間もなく任期が切れることとなる。平成２４年度からは新たな委員で組織することになるが、Ｋ委員のご意見として「もう少し委員を増やしてみてもどうか。」とあり、それを踏まえて事務局の方から委員についての考え方を説明願いたい。

【事務局】

平成２２年６月に立ち上げた本委員会を５回、小委員会を６回、それからリレートークをはじめ皆様に従事いただいたことが４回あり、立ち上げ以降、ようやく２年が終わるといふことで、心から感謝申し上げます。今後だが、本日の各委員からのご意見にもあったとおり、モッタイナイ運動については非常に時間がかかる取組であること、如何に市民の中に浸透させていくか、地道の取組が如何に重要かというご意見を頂戴したところである。

これらのことから、是非、次年度以降も委員会の構成については、現在の構成を基本として、引き続きお願いをしてまいりたいと思っている。

【委員長】

今の説明のとおり、引き続き委員をお願いしたいということだが、各団体内部での変更もあると思われる。その点はどうか。

【事務局】

恐らく、そのように思うが、その点は改めて書面をもって確認させていただくことを前

提として、やはり基本的には現体制を基本とさせていただきたいと思うが、どうか。

【委員長】

委員の皆さんはいかがか。

【西委員】

各団体には推薦状のような形をとるということか。

【事務局】

そのとおり。

【串田助手（村山教授代理）】

本学と新潟大学農学部の方で、米倉地区で食の循環によるまちづくりの先進地地区として活動している。その中では、地元食材を使用しているとか、食の循環を意識しているといった調査を検討しているので、調査の結果を本委員会でも報告させていただきたいと思っている。ご報告まで。

【委員長】

米倉地区は決定か。

【串田助手（村山教授代理）】

その予定である。

【委員長】

他にご意見等ないようなので、これにて委員会を終了させていただく。引き続きよろしくお願ひしたい。

5 閉会